鳳潭の『扶桑續入總目錄』について

高橋　正隆

一

華厳宗の鳳潭（一六五七―一七三八）の編んだ目録に、『扶桑蔵外現存目録』というのがある。『大正新修大蔵經』別巻二（法宝総目録第二冊）に収録されているものであるが、これの寫本は、同名で竜谷大学図書館に、また書名を異にして他に伝存している。『扶桑續入総目録』という一冊がそれで、京都大学図書館に所蔵する一本は、宝永五年に僧英泉なるものが書寫したものの青寫眞である。京都大学図書館所蔵の佛典の一群の資料には、明治三五年に蔵經書院を設け、前田慧雲・中野達慧らが主宰して忍徴上人の麗明対校本を定本として卍字蔵經が、引つづいて正蔵に漏れた支那選述の各宗章疏や禪籍を卍大日本續藏經の名のもとに上梓された蔵經書院の收集資料のなかに未刊部分として保存されているものの一部がある。續蔵經に不載の佛典は、一部分がつづいて刊行された大正新修大蔵經に所載されることになるのであるが、續蔵の稿がそのまま用いられたかどうか審らかでない。ところで、鳳潭の編んだ目録が、『昭和宝法総目録』では現存目録として伝えられながら、一方では續入総目録として伝えている点、興味ふかいものがある。

鳳潭、諱・僧濬。叡山に上って天台の教観を兼ね修めた。ときに、支那を經て印度に渡らんという大志を抱いたが、厳重な鎖國の國禁によって果すことをえず、よって処々に名師を尋ねて顕密を究め、華厳の章疏の研究に心力を盡し、天台・華厳二宗を融和して、華厳宗の再興を期した。荻生

徂來（一六六六―一七二八）との問答ののち、宝永四年（一七〇七）に『華厳一乗教分記輔宗匡真鈔』十巻を著わして、華厳に對する自家の意見を発表したが、この著述において、鳳潭は自ら賢首大師の正統をもって任じた。洛西松尾に大華厳寺を創め、華厳の典籍を刊行して世に流布せしめた。[1]また、書を著わして諸宗の教義を激しく論難攻撃し、諸宗の学匠またこれを評して、議論百出、攻撃駁辨すこぶる盛観を呈した。今日のこされている多くの著述に接するとき、往時の論争のはげしさを彷彿させるものがある。結果、諸宗の論客を動かし、佛教学界に多大の刺激を與えたのであった。しかし、鳳潭の説く華厳の学説は、正統の学説とはいいがたく、後学をして岐路に迷わしめるものであるという見方もある。

法蔵にかえれと主張した鳳潭は、法蔵の華厳学の研究のために、奈良や京都の古刹を訪れて、わが國に伝存している古書の捜索につとめたのであった。そして、数多くの佛教の典籍を被覧に及んだ。そのなかから上梓したもの、研鑽の稿を刊行したもの身丈にも及び、また典籍捜索におけるさまざまな逸話もある程で、その博識と佛教の学問のすすめ方をよく示している[2]と思う。それは鳳潭と諸宗学匠との往復辨論のなかから、それぞれの宗学が展開し、佛教の学問が盛んになってゆく過程でみとめうる。例えば、鳳潭が『念佛往生明導劄』（享保十五年）を著わして、一切の浄土教を破毀し、善導・法然・親鸞の三祖の教化を嘲罵することがあったとき、選擇本願論について浄土教団の側から反論が續出し、法霖（一六九三―一七四一）の『浄土折衝篇』のごとき、たくみに天台の教理を用いてその教説を評破したが、この論争のなかから、眞宗本尊についての問題が提起され、やがて教団内にあって宗義安心の論争へと展開してゆき、祖典の理解がいっそう鮮明にされることとなった。本願寺の宗学のなかで、この宗義安心の諍論の歸結が、祖典に対する正確な理解を求めた桂厳・大瀛らの明快な批判のあったことをうかがうとき、往時の佛教研究のありかたを理解できる[3]と思う。鳳潭の学理について問題点が指摘されるのは、その論証の多岐にわたる結果から生じたものでなかったかと考えられる。いま、ここで鳳潭の華厳の学説を喋々しようというのではない。純粋な華厳教学の復興をはかった鳳潭の学理の基をなすものが、佛典の目録を編んだ偉業のなかに認められるといってよい。

鳳潭が入蔵を期して『扶桑續入総目録』と名付けて編んだ佛典目録の意味は、鉄眼版一切經のごとき和刻の蔵經の流布をみて、これに加えるべき佛教の論疏の目録を編纂し

たもので、『大明續入蔵目錄』のごとき例によるものと考える。その内容をみるに、八宗の典籍はいうにおよばず、浄土・禪の典籍をも加えていることを確かめることができる。すなわち、わが國に印刷術が伝わって以来そのわざは進んでゆくわけであるが、重ねて印本蔵經が伝来するころ、再度にわたって一切經上梓の計畫が試みられた結果、天海版・鉄眼版の蔵經の出現をみるのであったが、和刻の蔵經の出現をみて佛教の学問はいうにおよばず、漢文佛典を讀む機会の増加する結果から漢文学・國学の発展に寄与し、これらの学問が相俟ってさらに佛教の学問が練磨されて行ったあとが明らかにされている。[3] 槀版一切經の功は寛文八年（一六六八）から延寶六年（一六七八）であったから、したがって鳳潭がいかに早い時期に蔵經の内容検討を終えていたかがうかがわれる。

そして、入蔵すべきと示した典籍について、鳳潭は個々にあたってその内容を検討したようで、刊本・和刻・唐本の別、南都・栂尾などでの所在確認の事項を詳細に記載している。さらに、この目錄の書寫本の題名によって、現存の典籍の刊行・所在の確認のなされたものであることから、いま亡佚の典籍の存在の下限をうかがう手がかりとなることは有意義である。

二

新羅の元曉が著わした因明の章疏である『判比量論』は、『續蔵經』（一の九五）に廻向偈と識語のみが收錄されていて、本文は失われていた。しかし、『判比量論』は、わが國へはかなり早い時期に伝わり、奈良時代には幾度か書寫され、また讀まれたあとを正倉院文書によってあとづけることができるし、のち諸師の章疏に引用されたあとを確かめ、さらに幾多の目錄に所載されていていかに多くの人びとが『判比量論』に接したかを知ることができる。[4] そして、この章疏は、そのうちの一本の廻向偈と識語をのみ殘して、本文は諸師の論疏に引用された部分を除いて失われてしまうことになった。石田茂作博士の『寫經より見たる奈良朝佛教の研究』所載の「奈良朝現在一切經疏目錄」にも跋文のみ現存と記錄する。

しかるに、從來、不伝とされていた『判比量論』の本文の断簡が紹介されることとなった。神田喜一郎博士のご所蔵になるもので、富貴原章信先生の詳細な研究を附して、昭和四二年に公刊された。[4] すなわち、神田先生ご所蔵の「草書断簡」三紙は、世に東寺切といわれる獨草の書風で、料紙の継目の紙背には光明皇后紫微中台ゆかりの「内家私

印」印が押されているもので、神田先生はこれが明治四五年刊行の『書苑』に書影が載っている古寫本「判比量論」断簡（廻向偈・識語）と書体が酷似し、またそれにも「内家私印」印が押されているから、それと一具のものであろうと示されたことから、その本文を検するに、その一部が藏俊の『因明大疏抄』などに引証されていることから『判比量論』に間違いないものとされた。『判比量論』は、正倉院文書にみえる寫了律論疏章集傳等帳（天平十五年、24―252）や紫微中台目錄（天平勝宝五年・12―534）に「判比量論一卷　二五張」とあって総量を推量できるが、紹介されたものはおよそ八分の一にあたる。

この光明皇后ゆかりの『判比量論』古寫本の断簡を影印に付して公開されると、同卷の一部と思われるものが照会されてきたなかで、酒井宇吉氏所蔵の手鑑のなかに弘法大師筆として留められていた一紙が、料紙・筆跡などの面から同卷と確認された。⑤また、『書苑』にその書影をのこしたまま行方がわからなかった廻向偈と識語の部分が出現し、神田先生の許へ届けられ、一具のものとして添えられたことを付言しておきたい。

紫微中台に置かれていた典籍のなかで、現存するものは數点確認されるが、紫微中台の目錄と照合して確認できるのはこの『判比量論』断簡のみである。相ついで『判比量論』の書影が出現するころ、この章疏の伝存流布の記錄をとどめるよう助言をうけ、爾来かなりの日時を経過したことになる。富貴原先生の所説を参照して、手許にある資料によって『判比量論』がみえる記錄を年譜にまとめると、つぎのごとくになる。

No	西暦	和暦	記事（資料名・数字は正倉院文書の巻・頁）
1	六七一	（咸亨2）	元暁『判比量論』を著わす（識語）
2	（七一四）		『唯識論了義燈』（慧沼）に引証さる
3	七三一	天平3	『維摩宗要』（元暁）書寫（元暁著述初見・7―23）
4	七四〇	天平12・7・8	自常目録寫加經論疏章（7―488）
5	七四三	天平15	写了律論章集傳等帳（24―252）
6	七四六	天平18	寫未寫大乘經論疏（24―397）
7	七四六	天平18・3・20	寫疏經師手実帳（9―147）
8	七四七	天平19・10・1	寫疏論集納受帳（9―366）
9	七四七	天平19・6・4	經疏検定帳（9―384）
10	七四七	天平19・6・7	寫疏所解「申見所寫并未寫疏等事」（9―386）

11	七四八	天平20・8・4	宮一切經故納櫃帳（10—331）
12	七四八	天平20・12	未分經目録（44—540）
13	七四九	天平勝宝元、7・28	本經疏奉請帳（11—14）
14	七五〇	天平勝宝2・4・21	一切經散帳（11—226）
15	七五〇	天平勝宝2・8・1	一切經散帳案（11—359）
16	七五〇	天平勝宝2・12・24	造東寺司櫃納經并未返經論注文（11—451）
17	七五二	天平勝宝4（3）・6	造東寺司請經疏注文案（12—258）
17′	七五二	天平勝宝4・6・28	從行信師所奉經論疏目録（12—385）
18	七五三	天平勝宝5・5・7	紫微中台請留經目録（12—441）
19	—	—	奉写章疏集傳目録（12—534）
20	七六七	天平神護3・2・22	造東寺司移（17—47）
21	七六七	天平神護3・2・22	造東大寺司謹奏（17—49）
22	七六八	神護景雲2・2・10	奉写一切經牒（17—141）
23	（七七二）	（宝亀3）	『唯識分量決』（善珠）所引
24	（七八一）	（天應年中）	『因明疏明燈抄』（善珠）所引
25	九一四	延喜19	『華厳宗疏並因明録』（円超撰）所収
26	九二四	延長2	『山王院蔵』（比丘空慧撰）所収
27	一〇九〇	（高麗宣宗7）	『新編諸宗教蔵総録』（義天撰）所収
28	一〇九四	寛治8	『東域伝燈目録』（永超撰）所収
29	一一五二	仁平2	『因明大疏抄』（蔵俊）所引
30	一一七六	安元2	『注進法相宗章疏』（蔵俊撰）所収
31	—	—	『唯識本文抄』所引
32	一二五〇	建長2	『高山寺聖教目録』所収
33	（一三二一）	（元亨元）	『華厳宗經論章疏目録』（凝然撰）所収
34	（一七三八）	（元文3）	『扶桑蔵外現存目録』（鳳潭撰）所収
35	一七九〇	寛政2	『諸宗章疏録』（謙順撰）所収
36	一八一〇	文化7	廻向偈・識語を模刻して断簡に付す（『書苑』七解説）
37	（一九〇五）	（明治38）	廻向偈・識語『續蔵』に所収
38	一九一二	明治35・5	廻向偈・識語書影『書苑』七所収
39	（一九三四）	（昭和9）	廻向偈・識語『大正蔵經』所収
40	一九六七	昭和42	『判比量論』景印
41	一九六八	昭和43	『判比量論』断簡出現（酒井氏手鑑）
42			『判比量論』大蔵会展示
43	一九七八	昭和53	廻向偈・識語出現

上記の表について、少し補足すると、正倉院文書の記録に、『判比量論』の名はしばしば出現したが、このなかでNo.4・6・8の文書にみえる『判比量論』は、書寫するために必要なテキストを借用した記録で、所藏者は大官寺(4)・飛鳥寺(6)・元興寺(8)などであった。それぞれのところに『判比量論』の抄本の存在を認めることによって、この章疏が處々に置かれて研鑽されていたことを伺いうる。正倉院文書には寫經の過程を知る記録である手實帳(7)・検定帳(9)のごときものもある。光明皇后が紫微中台に經卷を留められるまでに、兩三度の一切經書寫が行われている。そのうち、天平十二年五月一日の識語をもつ、いわゆる天平五月一日經は、天平八年九月二十八日から始められ、同十四年十二月十三日までに開元釋教錄の約九割にあたる四五六一卷を寫し終えて十二合の櫃に納められた。これ以上の寫經の底本を求めることが困難となったが、天平十五年五月一日より釋教錄にない章疏にまで範圍をひろげて書寫をはじめ、底本の入手に苦しみながら、天平勝宝八年までつづけられ、総数約七千余卷を書寫されたという。⑥『判比量論』は、天平十九年には書寫し終えており(10)(11)、宮一切經目錄故納櫃帳に載せられた。書寫された經卷章疏等は、ひろく貸出されることがあった(14)(15)(16)。このうち、行信（～七五〇）が晩年に発願して、その弟子孝仁によって神護景雲元年（七六八）に完成した行信願經一切經に『判比量論』が借出されている(17)ことが知られる。紫微中台へ請留られた經疏の目錄のなかに『判比量論』の名がみえる(18)が、奈良時代に多く書寫され、処々に伝存したであろう『判比量論』が、紫微中台ゆかりの寫本の零本のみ、今に傳えたのであった。

元曉の『判比量論』は、のち佛教学の基本図書としてかなり讀みつづけられたらしく、華嚴の「圓超錄」・「藏俊錄」をはじめ、興福寺の「永超錄」、高麗義天撰『新編諸宗教総錄』、そして凝然の著わした『華嚴宗經論章疏目錄』にもその名をとどめている。具體的には、善珠の著述(23・24)や藏俊の著述（29）に引証されていたことは表示のごとくである。ところで、高麗義天の目錄は諸目錄に依って編まれたごとく、また華厳宗・法相宗の立場で編まれた目錄はそれぞれ編纂上の留意点があったようであるから、元曉の著わした因明の著書が載せられるのは肯首できるとしても、つぎにかかげる目錄は趣きを異にする。青蓮院吉水藏に伝わる「山王院藏」は台密の書目であり、また「高山寺聖教目錄」は建長三年後嵯峨院の仰せによって注進された高山寺經庫に伝わる萬余の典籍のなかから百合にまとめて編んだ佛典の基本圖書というものであった。とくに、高山寺聖

教目錄には、一切經・五部大乘などの佛典はもちろん、華厳・台密・東密など八宗の典籍のほか淨土教の典籍・外典なども收めており、豐富な內容を網羅している。これらの目錄のなかに『判比量論』が因明の典籍の代表的なものとして載せられているのである。

降って、鳳潭が『扶桑續入総目錄』を編んで『判比量論』も編入されたあと、この章疏は佛教学の典籍としてその行方を失ってしまうことになるのでった。寛政二年に成る『諸宗章疏錄』は、智積院謙順が諸目錄を再掲して編んだものであったから、鳳潭の入蔵目錄のごとく、現存の有無の確認が審かでない。さすれば、鳳潭が親しく南都で被覽に及んだ『判比量論』は、現存の紫微中台ゆかりの卷子であったのであろうか。

紫微中台に所蔵されていた『判比量論』は、そののち流出して、文化七年（一八一〇）には、この章疏を切断し、廻向偈・識語を模刻して一紙を附して好事家たちの間に頒れた經緯については『書苑』の解説に詳しい。そして、のち再びその数紙が相まみゆることとなった経過は既述のとおりである。

元曉が『判比量論』を著わしてのち、比較的早い時期にわが國に伝わっていたのであるが、この章疏が當時の佛教の基本図書としての役割をはたしていたのは、元曉の著述の內容による点もあろうが、つぎのような事情も無視できないかと思う。すなわち、一切經の書寫が國家的な規模で行われ、やがて玄昉らが多くの經卷を將來して歸朝すると、天平八年九月の寫經目錄（8—53）、寫經請本帳（8—54）、にみられるごとく、玄昉が舶載の經典を原本として、開元目錄による一切經の書寫が行われるのが常になるわけであるが、その功がみられるころ章疏の書寫が開始されることとなる。そして、原本テキストの入手に苦しみながら書寫されてゆくのであるが、天平十二年七月八日付「寫經所啓」にみえる「自常目錄寫加經論疏□」目錄は、表題の示すごとく、常の目錄に新たに加うるべき經論疏章八一五卷の目錄であった。この文書は石村布勢麻呂・大田広人が署しているから、この啓は署名者からみて北大臣家寫經所のもの（七—486）であるという。[7] この新規に加えられた經論疏章のなかに「判比量論」一卷があった。この一本は大官寺に在ったものである。ひとたび常目錄に加えられた經卷は、そののち機会あるごとに書寫しつづけられたことは表示のとおりであった。一方、これと反對に、書寫經卷のリストにのぼらなかったものには、奈良時代にまったく書寫されなかったものもあったようであるが、これについては後述

することになる。

三

鳳潭が入蔵を期待して編んだ経巻の現存目録によって、かつて散失し、再び姿をあらわした元曉の論著の完本の伝存の下限を推定するかたわら、鳳潭が目録に採用したゆえんをほぼ明らかになしえたと思う。それは奈良時代、新規書寫の経巻のリストに加えられてから、かぎりなく書寫され、論師の著述に引証されていた佛教研究の基本図書であったからであった。

かかる事情は、別の典籍からも説明できると思う。鳳潭が『念佛往生明導劄』を著わして批判した善導大師の著述は、早くから將來されていたし、また入唐の高僧たちも、それぞれ持ち歸ってこられたところである。ところで、これの流布はわが國にあって淨土信仰がおこり、源信の『往生要集』のごとき著述に引証されると多くの人びとの目にとまることになる。法然上人が、善導大師説を敷衍して念佛をすすめ、專修念佛宗をおこされることになるが、上人の歿後、この著述は淨土三部經とともに上梓され、これらが普及して淨土教版の成立をみることとなる。[8] この淨土教版について、「淨土教版」という名辞を与えることすら批判するむきもあったが、[9] 遺册の少ない善導大師遺文の古刊本を求めて、その書誌学的考証の結果、繰返し版を改め、ときには嚴しい校訂を加えて上梓をなされてきた淨土教版こそ、東洋の印刷製本の技術を飛躍的に進歩させたものであったことを紹介[8]したことがある。この過程で、一切經刊行のことが計画されたごとき、淨土教団のそのいきぶきを十分に理解できることと思う。さればこそ、善導大師の遺文は、明恵上人ゆかりの高山寺の經庫にも置かれ、建長二年の「高山寺聖教目錄」にも、基本図書として記載されていたのであった。

鳳潭は、『扶桑續入総目錄』のなかに、善導大師遺文を載せている。

肆刊觀經義記巻三　善導述
肆刊觀念法門巻一　善導述
肆刊法事贊巻一　善導述
肆刊般舟讃巻一　善導述

とあって、「五部九巻」のなかの『往生禮讃偈』を缺く。『扶桑續入総目錄』の構成をみるに、八宗と・淨土・禪の配列など、高山寺の聖教目錄と近いものがある。『高山寺聖教目錄』は、建長二年に編纂されたのち、その典籍は方便智院に受繼がれたものが、他をあわせて法鼓台經蔵に伝

えられているが、建長の聖教目録は、『高山寺顯聖教目錄』にそのまま掲載されている。顯聖教目錄は、寛永十年に成立したもので、上巻にそのまま載せ、下巻には当時高山寺に伝えられていた経巻を、「新加之」（奥書）と作成したものであった。[10] この目錄は、大谷大学図書館ほか数箇所に古寫本を伝えており、かなり流布していたこととみえる。もちろん、鳳潭は、この目錄のことは承知していたとみなければなるまい。『扶桑續入総目錄』には、高山寺の所蔵を示す「栂尾」という記入[11]をしばしばみうけるのは、鳳潭が實際に高山寺の經庫を訪れたことを示すものである。江戸時代、高山寺へは幾人かの学僧や書誌学者が、その豊富な量の典籍の捜索のために訪れるのであったが、鳳潭はもっとも早い草わけの一人であったかと思われる。

善導大師遺文の五部九巻のうち、鳳潭が『扶桑蔵外現存目錄』に、『往生礼讃偈』を載せなかったのは、この部分が伝存しなかったからではない。當時、高山寺の經庫には淨土の典籍の箱は空箱に等しく、欠本の狀態であったと本願寺惠空講師の伝にあるから、鳳潭が高山寺本に依って目錄を編んだのであれば目錄記載の説は肯首できるが、鳳潭の目錄には肆刊とある。したがって、既刊の五部九巻に依っていることは明らかであろう。また、五部九巻は寛文七年（一六六七）に丁字屋三郎兵衛によって刊行されて[12]いるから、かなりの部数が市井に出廻っていたので、鳳潭の目に触れなかった筈がない。したがって、鳳潭が『往生禮讃偈』を除いた理由は、この本がすでに入蔵されていたからとみるべきである。すなわち、善導大師の著述のうち、『往生礼讃偈』のみが唐の智昇の選述した『集諸經礼懺儀』下に收錄されており、この『集諸經礼懺儀』は『開元釋教錄』巻九、また『貞元刊定釋教目錄』巻二十四に新編入蔵として載せられているから、一切經錄内の典籍として請来され書寫されてきた。そしてまた、高麗蔵經には『集諸經礼懺儀』が收錄しているから、この版本も早くからわが國に伝わっていたことになる。かくて、『往生礼讃偈』の入蔵の事実を認めたうえで、鳳潭は、すでに五部九巻としてまとまって伝わっていた善導大師の遺文のうち、『往生礼讃偈』を除いた四部の著述を『扶桑續入総目錄』の中に收錄したのであった。もって、鳳潭の佛典研究の立場をよくうかがうことができると思う。

四

鳳潭の入蔵目錄に漏れているが、上記二件の典籍の流布の事情とはまったく対象的な立場をとる章疏が現存する。

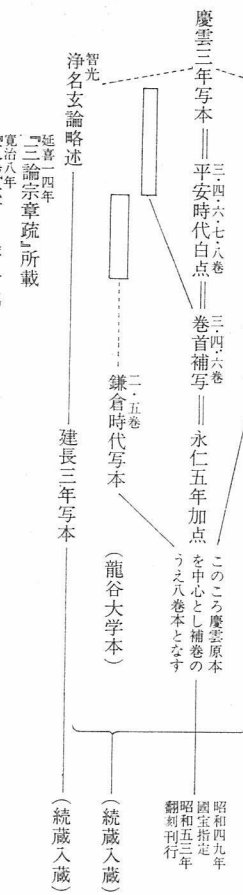
『淨名玄論』がそれである。この章疏は、唐の吉蔵（五六九～六二三）の著わした維摩經の研究書である。この章疏はかなり早くわが國に伝えられており、白鳳時代の慶雲三年（七〇六）に書寫された一本が現存する。神田喜一郎先生のお手許に所蔵されている慶雲三年寫という識語⑬をもつ『淨名玄論』八卷がそれである。この識語は後の記入で、本文は中國の寫本であるとするむきもあるが⑭、全卷同筆であってわが國最古の識語をもつ書籍であることに相違ない⑮。この章疏は、大正六年一一月に開催された第三回京都大蔵会に卷第六のみが展示公開された。そののち、識語のみが諸資料集、あるいは書の資料として紹介されるととどまっていた。また、書影が紹介されたのは『書道全集』九（昭和二九年刊）であり、詳細な解説を附したのは、五島美術館の『古寫經展目錄』（昭和四六年）があるのみであった。紹介の諸本の訂正を必要とするむきもあるので、要点を表示すると、つぎのごとくである。

	書名	著者、発行所	刊年	要点
1	京都大蔵会目録	大蔵会	大6	公開最初の記録
2	古寫經綜鑒	田中塊堂	昭17	巻八に識語あり
3	寧楽遺文	竹内理三	昭19	神田香巌蔵 巻八識語
4	日本寫經綜鑒	田中塊堂	昭28	故神田孝平蔵 巻六識語
5	日本書道全集9	平凡社	昭29	巻頭鎌倉時代補寫 巻六書影掲載
6	古寫經展目録	五島美術館	昭46	巻六・巻七 書影掲載
7	日本寫經現存目録	田中塊堂	昭48	巻第八識語あり

右表中、(1)(5)(6)は正確な紹介。巻第八に識語は無い(2)(3)(7)。巻第六巻頭の補寫は、平安時代初期⑯であるから鎌倉補寫とするのは誤り(4)。所蔵者については、最も正確になされなければなるまい⑰(3)。

『淨名玄論』は、龍谷大学、高野山大学、京都大学の各図書館にその寫本を伝えているが、いずれも江戸時代以後の寫本⑱である。白鳳時代、すでに寫本をとどめていた『淨名玄論』であったが、奈良時代を通じてこれが書寫されたという記録を正倉院文書に求められないし、また寫本についても慶雲三年寫本を除いて遺冊をとどめていないのである。が、智光の『淨名玄論略述』のごとき著述があり、鎌倉時代の寫本を伝えているので、かなり詳細な研究がなされたものとみるべきであろう。じじつ、元興寺安遠の『三論宗章疏』・永超の『東域伝灯目録』や『漢語灯録』所收の「淨土初学鈔」に『淨名玄論』の名がみえており、これら

の目録に所載された意味は、この書の佛教研究のための基本図書としての立場を示し、その普及の程度を把握できるものと考える。ところで、慶雲三年寫『淨名玄論』は、日本に伝わる最古の典籍であると同時に、この書物がそれぞれの時代に讀みつづけられた記録をとどめていることが注意されている。すなわち、巻中に古点のあることは、すでに『書道全集』『古寫經展目錄』の解説で紹介されたのであるが、その後の詳細な調査によって、平安時代の朱点（科段）、白点（句讀・科段）、鎌倉時代の墨点・朱点（句讀・科段）が加筆されていることが明らかにされた。[19] 一つの古寫本のなかに、異なる年代に讀みつづけられた記録をとどめることは、この記録を通じて、それぞれの年代に應じた理解のあったことを窺わしめ、巻第六・第八の飜刻で十分にこのことを立証[20]できる。さらに注目されることは、國宝『淨名玄論』八巻中、慶雲六年書寫になるものは、巻三・四・六・七・八の五巻で、巻一は平安時代初期の寫本、巻二・五は鎌倉時代書寫、また巻三・四・六は巻首を平安時代（白点を与えたのち）に補寫し、全巻永仁年に墨点を施している。他の資料を併せ『淨名玄論』の讀まれた形跡を図示すると、つぎのごとくになる。



正倉院文書のごとき記録にまったくその名をとどめなかった『淨名玄論』であるが、三論の学問とのかかわりあいにおいて、かなりよく讀まれたと思う。法然上人の名をもって著わされた「淨土初学鈔」には、吉藏の著述を集めたなかに『淨名玄論』を所載するが、上人がこの書をすすめられたかどうか具體的には明らかでない。しかし、法然上人の伝記には、三論の学問をされた話がみえ、上人の門に會した人びとのなかに三

論の人があったことなどは、伝記の信憑性をある程度埋める新しい史料によって、[10]専修念佛宗の人びとの学問のありようを具体的に把握できることと思う。また、専修念佛宗の人びとの学問のありようは、浄土教版の盛行を認めるとき、[8]学問の進展の姿を確かめることができる。

五

東大寺を中心として三論の学問がすすめられたのは、さきに図示した『浄名玄論』の書誌の譜とほぼ合致する。[21]鳳潭が南都諸寺の經庫に入って紙子に章疏を寫して歸ったという逸話のあるごとく、鳳潭は東大寺の經庫の典籍を求めたことである。鳳潭の『扶桑續入総目錄』が、いま少しく遅い時期であったとすれば、あるいは『浄名玄論』のごとき、三論の章疏がいま少し加えられていたかと思う。このことは、鳳潭の『扶桑續入総目錄』編纂の姿をより具体的に示すことがらであろうかと考えるのである。

鳳潭は、日本において最初に古佚書の捜索を企てた人物で、後世、それに影響をうけたものが少なからずあった[2]という。『扶桑續入総目錄』を編むにあたって、個々の典籍について詳細な調査をすませたごとき、鳳潭の示した佛教研究のため周到な書誌学的研究の立場があったればこそ、かれが各宗派の教義に対して投げかけた論爭があったわけで、結果、この論爭の中から、佛典解釋上の相違点が見出され、その解明のために、いやがうえにも、各教団において、宗学が盛んになって行ったのである。現存する二・三の典籍の書誌学的考証から、鳳潭の入蔵目錄の立場をうかがってみたわけであるが、個々の例示した典籍の詳細な研究は、別の機会にゆずりたい。

註

① 鷲尾教順篇『日本佛家人名辞典』、辻善之助『日本佛教史』近世篇
② 神田喜一郎『墨林簡話』鳳潭餘話、鳳潭・闇斎・徂来
③ 拙稿「江戸時代真宗各派の学匠の著書・教学本とその内容」（『講座親鸞の思想』9所收）
④ 富貴原章信『判比量論の研究』
⑤ 富貴原章信「判比量論」（『日本佛教』二九号所收）
⑥ 福山敏男「奈良朝に於ける写經所に関する研究」（『史学雑誌』四三―一二）、皆川完一「光明皇后願經五月一日經の書寫について」（『日本古代史論集』上所收）、井上薫著『奈良朝佛教史の研究』
⑦ 井上薫〔注六〕著書
⑧ 拙稿「善導大師遺文の書誌研究」（『善導大師研究』所收）
⑨ 木宮泰彦著『日本印刷文化史』
⑩ 拙著『鎌倉新佛教の管見』

⑪　『扶桑蔵外現存目録』は脚註に、『扶桑續入総目録』には頭註にて記す。

⑫　佐々木求己著『真宗典籍刊行史稿』

⑬　識語、巻第六巻末　慶雲三年十二月八日記
　　巻第四巻末　慶雲参年十二月伍日記

⑭　禿氏祐祥「国産紙と輸入紙」（『和紙研究』十六号）

⑮　禿氏祐祥氏の論旨は、料紙が中国産のものゆえに、中国の書寫本と断定したものであるが、筆跡研究のうえから、墨付などの特色をみると、古渡りの料紙に後世になって書寫したものと理解すべきかと思う。（詳細について別に稿を用意したいと思っている。）

⑯　横超慧日編『浄名玄論』巻六翻刻本凡例および『古寫經展目録』（五島美術館）参照。

⑰　竹内理三氏のいう神田孝平は、明治初年兵庫県令として活躍した人で、蒐書家でもあったが、収書は神田香巖居士のそれとはまったく質を異にしている。

⑱　京大図書館本、續蔵經の原稿。高野山大学本・享保九年寫本。

⑲　石塚晴通「浄名玄論慶雲三年寫本の白点」第三五回訓點語学会発表レジメ。

⑳　横超慧日編『浄名玄論』凡例。

㉑　堀池春峰「東大寺略年表」（『東大寺展』目録）

鳳潭の『扶桑蔵外現存目録』についての評価は、神田喜一郎先生が『墨林簡話』のなかで試みられたのが初見である。『浄名玄論』『判比量論』の閲覧をお許しいただいたことが、この稿をおこすについて参考となった。衷心より御礼申し上げたい。

なお、『浄名玄論』の詳細な研究は、目下翻刻をすすめている、國宝『浄名玄論』（慶雲三年写）の解説研究において発表する予定である。

（本学専任講師　図書館学）